



青年期における「子どもが欲しい」気持ちの規定因： 計画的行動の理論による分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今城, 周造 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005131

青年期における「子どもが欲しい」気持ちの規定因 —計画的行動の理論による分析—

今 城 周 造

北海道教育大学函館校心理学研究室

キーワード：態度—行動関係，少子化，theory of planned behavior，共分散構造分析

少子化が深刻になる中で，人口の過度の減少を防止することは重要である。厚生白書（1998）によれば，1996年現在の合計特殊出生数は1.43であり，これは我が国が人口を維持できる水準にないことを示している。少子化と高齢化は両輪であり，極端な少子高齢社会を招来しないためには，一定の出生人口の維持が不可欠であろう。

少子化の原因としては，晩婚化や女性の社会進出などが大きな要因として挙げられているが，本研究では，「子どもが欲しい」という気持ちに焦点を当て，その規定因を検討する。子どもが欲しい気持ちが強ければ，さまざまな悪条件が重なっても，子どもをもうけ，育てようとするだろう。一方，子どもを欲しい気持ちが弱ければ，たとえ社会的条件が整備され，子育ての環境が整っても，子どもをもうけようとはしないと考えられる。

本研究では「子どもが欲しい」気持ちを，子どもを持つ意思・行動意図と捉え，態度—行動関係の代表的な理論である計画的行動の理論（Ajzen, I., 1985, 1988, 1991）の枠組みから，その規定因を分析する。

計画的行動の理論 「子どもが欲しい」「子どもを持つ」という意思はどう形成されるのか。そこには少なくとも子どもや，子どものいる生活への肯定的な態度が関係しているであろう。

計画的行動の理論（Ajzen, I., 1985, 1988, 1991）は，合理的行為の理論（Ajzen, I., & Fishbein, M., 1980; Fishbein, M., & Ajzen, I., 1975）を拡張したものである。合理的行為の理論は，行動意図を行動への態度と主観的規範の2変数から予測するが，意志の力で統制（control）可能な行動にしか適用できないという限界がある。そこで計画的行動の理論では，第3の説明変数として行動の統制認知（perceived behavioral control）を加えた。統制認知とは，行動遂行の前提となる機会や資源（時間，資金，技能など）の利用可能性に関する認知を指す。ある行動が統制可能と認知されるほど，行動意図は行動として表出されやすい。またそれ以前に，遂行不可能と認知される行動は，意図されることが少ないであろう。

子どもが欲しい人，いつかは親になろうという人は，子ども好きであったり，子どもとの団欒を楽しみにしているなど，子どもを持つことに肯定的な態度を持つであろう。また周囲の友人や親戚，親から「2世はまだか」「いつかは孫を」という期待を感じ，それに応えたいと念願しているだろう。さらに妻が専業主婦であれば育児に支障はなく，子どもを持つことに積極的になりやすいが，夫婦で働いていて昼間の育児に不安があれば，子どもを持つことに消極的になるだろう。

このように子どもを持つ意思についても、計画的行動の理論が仮定する変数は有効であると考えられる。本研究では、まず青年を対象として、これらの諸変数の相対的重要性を検討する。また、育児と結婚には密接な関係があるが、結婚への態度が子どもを持つ意思に及ぼす効果についても併せて検討する。

方 法

被験者 被験者は、大学生男女139名（男61，女78）。心理学の授業時間に集団実施した。

手続き 「態度の構造に関する調査」と称する質問紙調査を行った。「いつか子どもを持つこと」について、行動への態度、主観的規範、統制認知、行動意図を尋ねた。これには包括的測度（global measure）と信念準拠測度（belief-based measure）の両方を用意したが、本論文では包括的測度の結果のみを報告する¹。また結婚についても行動への態度、行動意図を尋ねた。

計画的行動の理論の変数 Ajzen（1985，1988，1991）に基づき、諸変数を測定した。行動への態度はSD法を用いた。「私がいつか子どもを持つこと」については、「悲しい－嬉しい」「不幸な－幸福な」「つまらない－楽しい」「悪い－良い」「束縛的－解放的」「役に立つ－役に立たない」「不自由な－自由な」で7段階評定させた。

主観的規範については、「あなたの周囲の人は、あなたが子どもを持つことをどう思うでしょうか」という導入の後、「私にとって大切な人の多くは『私がいつか子どもを持つこと』を、歓迎しない－歓迎する」「私にとって大切な人の多くは『私がいつか子どもを持つべきだ』と思う」ということは、なさそう－ありそう」の2項目で尋ねた。

統制認知については、「あなたがいつか子どもをもつための準備や環境は整っているでしょう

か」という導入のあと、「私がいつか子どもを持つこと」に関する「困難－容易」「障害物がある－障害物はない」「思い通りにならない－思い通りになる」の評定を求めた。

行動意図については、「あなたには『いつか子どもを持つ』という気持ちがありますか」という導入のあと、「私がいつか子どもを持つことは、なさそう－ありそう」「『私はいつか子どもを持つつもりだ』ということは、あてはまらない－あてはまる」「『子どもは要らない』ということは、あてはまらない－あてはまる」の評定を求めた。

結婚への態度は、「私がいつか結婚すること」に関する「悲しい－嬉しい」「不幸な－幸福な」「つまらない－楽しい」「悪い－良い」「束縛的－解放的」「役に立たない－役に立つ」「自由な－不自由な」の評定であった。結婚に関する行動意図は、「私がいつか結婚すること」は、なさそう－ありそう」「『私はいつか結婚するつもりだ』ということは、あてはまらない－あてはまる」「『結婚する気はない』ということは、あてはまらない－あてはまる」で尋ねた。

結 果

計画的行動の理論 共分散構造分析の準備として探索的因子分析（重み付けのない最小2乗解，固有値1以上の基準）を各変数ごとに行った。いずれの理論変数についても1因子解が得られ，因子負荷量の大きい2項目をそれぞれの代表として共分散構造分析で用いた。

共分散構造分析はAMOS（version 4）で行った。計画的行動の理論に基づくパス図をFig. 1に示す。識別性確保のため，態度，主観的規範，統制認知の分散を1に，また全ての誤差の係数を1に固定した。

適合度指標については $\chi^2(7.79, df=14,$

1 行動への態度，主観的規範について，信念準拠測度と包括的測度の結果は同様であったが，信念準拠測度による統制認知指標は，項目間の相関が低く分析に使えなかった。

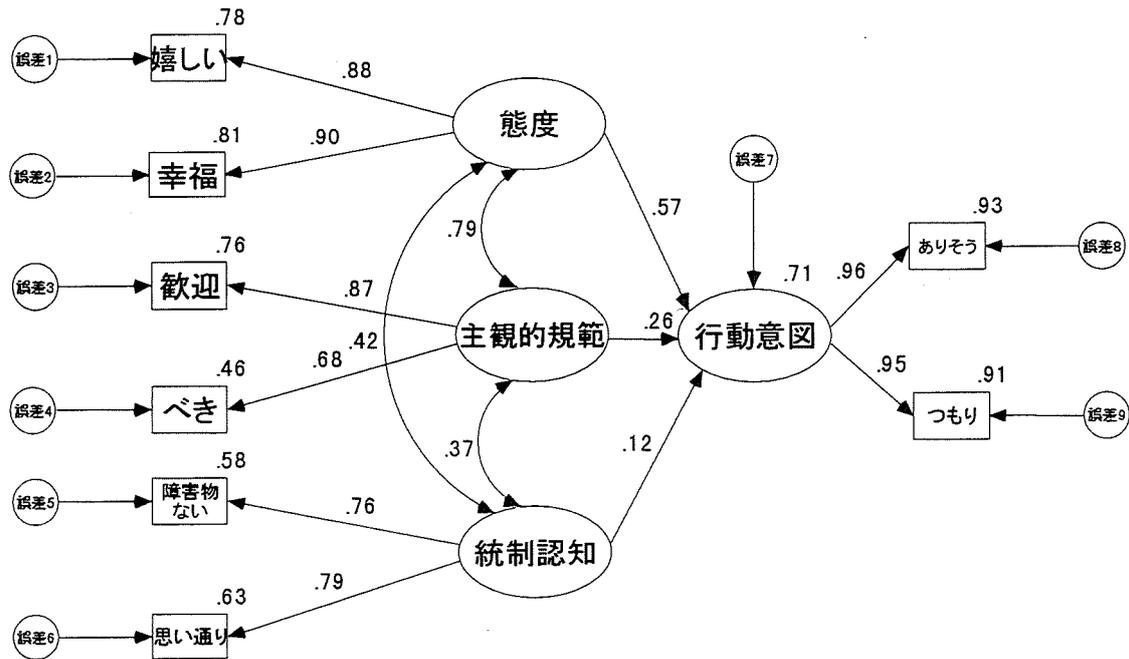


Fig. 1 計画的行動の理論に基づくパス図

$p = .90$) となり、モデルは棄却されなかった。また AGFI も .96 と十分な値であった。

各変数の右肩の数値は重相関係数の平方である。長方形で表された観測変数と、楕円で表された潜在変数は、十分に対応づけられている（重相関係数の平方は .46～.93）。外生変数である態度、主観的規範、統制認知の間の相関は、いずれも正の係数で有意であった（検定統計量は態度－主観的規範が 14.06、主観的規範－統制認知が 3.74、態度－統制認知が 4.68）。

行動意図は、態度、主観的規範、統制認知によって十分によく予測されている（重相関係数の平方は .71）。因果係数を見ると、態度と主観的規範は有意で（検定統計量はそれぞれ 4.41、2.03）、統制認知については傾向が見られた（1.68）。

結婚への態度が子ども行動意図に及ぼす効果 結婚への態度と、子どもへの態度・子どもを持つ行動意図との間に Fig. 2 のような関係を想定した。このパス図について、計画的行動の理論の際と同じ方法で共分散構造分析を行った。

適合度指標については $\chi^2(29.24, df=26, p=.30)$ となり、モデルは棄却されなかった。

また AGFI も .92 と十分な値であった。

観測変数と潜在変数は、十分に対応づけられている（重相関係数の平方は .68～.92）。外生変数である結婚態度と子ども態度の間の相関は、正の係数で有意であった（検定統計量は 17.01）。

子どもを持つとしようとする行動意図は、結婚への態度、子どもを持つことへの態度の 2 変数によって、十分によく予測されている（重相関係数の平方は .67）。因果係数を見ると、結婚態度と子ども態度は正の係数でそれぞれ有意であった（検定統計量は 2.67、6.86）。

考 察

計画的行動の理論 本研究の結果は、計画的行動の理論の仮説を部分的に支持している（Fig. 1）。まず態度と行動意図は、正の因果関係にある。次に主観的規範と行動意図も同様の結果であるが、その関係は弱い。一方、統制認知については、正の因果関係のあることが示唆されるにとどまった。

計画的行動の理論の特徴は統制認知変数の追加であるが、本研究の結果は、その有効性を示すも

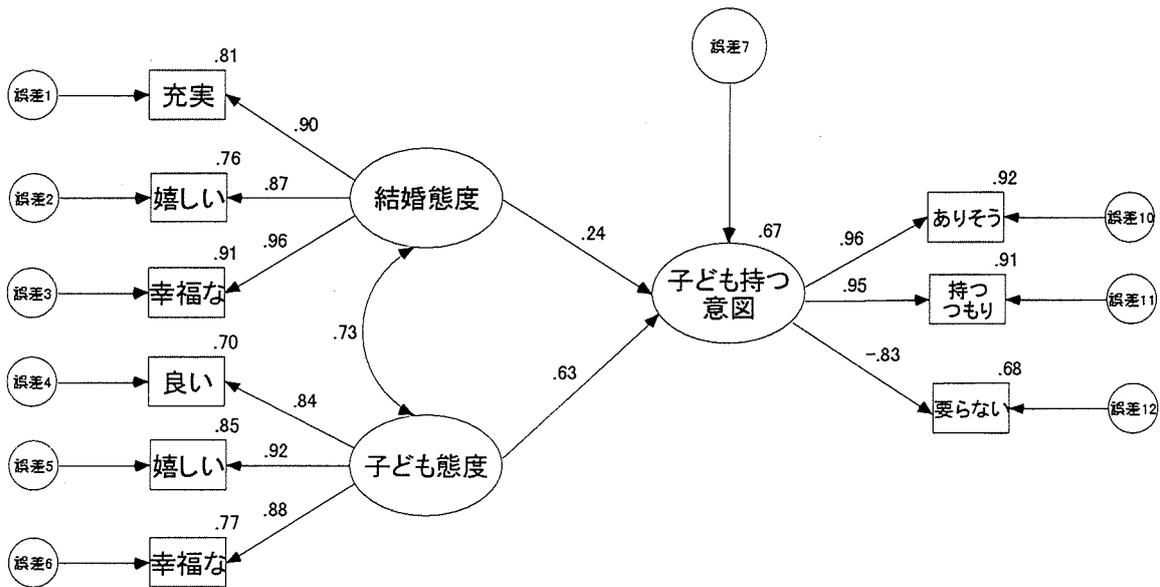


Fig. 2 結婚と子どもに関する態度が子どもを持つ行動意図に及ぼす効果

のではなかった。他方、態度と主観的規範は行動意図の規定因として有効であったので、本研究は合理的行為の理論を支持するものである。ただし、態度と主観的規範の相関関係は係数が.79と大きく、両者が未分化であることも注目される。

子ども及び結婚への態度 本研究の結果は、結婚への態度も、子どもを持つ行動意図の規定因であることを示している (Fig. 2)。まず子どもを持つことへの態度と行動意図は、正の因果関係にある。次に結婚への態度と行動意図も同様の結果であるが、その関係は有意ではあるが弱い。

子どもを持つ意思と結婚への態度とはやはり無関係ではなかったが、Ajzen & Fishbein (1977) が指摘するように、態度指標として行動指標との対応がより高い「子どもを持つこと」への態度の方が、子どもを持つ意思との関連は強かった。ただし、結婚態度と子ども態度の相関関係は係数が.73と大きく、両者が未分化であることは注目される。

少子化対策への含意 従来、少子化対策の重要な柱は「子育てと職業の両立支援」であり、それは今後も同様であると考えられる。しかし本研究の結果は、この対策の有効性に一定の疑問を投げかけるものである。すなわち「子育てと職業の両立

支援」や「地域の子育てネットワーク」は、計画的行動の理論の枠組みでは、行動の統制認知に関係する。これらの施策が効果を挙げれば、子どもを持つことは実現性を増し、行動の統制認知—自分にも、子どもを持ち・育てる資源がある—は、増大するであろう。しかし、本研究では、統制認知は行動意図の規定因として有意ではなく (Fig. 1)、また脚注1に記したように、統制認知の信念準拠指標を構成することさえできなかった。少なくとも本研究の対象者である大学生にとっては、子育て支援策のアピールは、少子化防止策として有効とは言えないであろう。

一方、子どもへの態度が有意な行動規定因であったことから、この態度を肯定的にする広報活動が有効な少子化防止策となりうるであろう。一般に青年にとっては、妊娠はまだ望まれないものであり、妊娠や子どもができることへの態度は必ずしも肯定的ではないかもしれない。しかし、将来自分が子どもを持つこと、親になることへの態度を肯定的にすることは可能であろう。子どもを持つことの喜びや幸せを、押し付けがましくなく、さりげなく伝えていくことが必要であろう。ただし、態度と主観的規範の相関が大きいことから (Fig. 1)、この態度は、周囲からの期待を認

知して形成されている可能性もある。

今後の課題 本研究では、信念準拠測度を構成することができなかった。項目としては「経済的な余裕」「仕事をして働いている」「子育て不安」「不妊症」などを用意したが、相互の相関は低かった。因子にまとまるような項目を精選することも必要であるが、まだ大学生である対象者に結婚後のことを尋ねること自体が、現実味に欠けたようである。

態度と主観的規範、また結婚態度と子ども態度の相関がそれぞれ大きかったことも、対象者が青年であったことと無関係ではないかもしれない。これらは、実際に表裏一体のものである可能性もある。しかし青年であるがゆえに、ただ単にまだ漠然としていて、考えが未分化である可能性も否定できない。年齢とともに、親が期待しても「子どもは要らない」と思う人や、結婚には魅力を感じないが子どもは欲しいという人が増え、青年期には高かった相関が減少する可能性はある。本研究で見られた外生変数（説明変数）間の高い相関関係が年齢とともに減少するかどうかは、今後の研究課題である。

以上のことは、より年齢の高い対象者を選んで今後の調査を行う必要性を示唆している。発達課題から言っても、出産は、就職、結婚の次であり、就職さえまだ身近でない大学生に出産・育児

のことを聞くのは多少無理だったかもしれない。今後は、結婚している人、あるいは少なくとも就職している人を対象として、信念準拠測度も用いた研究を進める必要がある。

引用文献

- Ajzen, I. 1985 From intentions to actions : A theory of planned behavior. In J.Kuhl and J.Beckman (Eds.), *Action - control : From cognition to behavior*. Heidelberg : Springer. Pp. 11-39.
- Ajzen, I. 1988 *Attitudes, personality, and behavior*. Chicago : The Dorsey Press.
- Ajzen, I. 1991 The theory of planned behavior. *Organizational behavior and human decision processes*, 50, 179-211.
- Ajzen, I., & Fishbein, M. 1977 attitude-behavior relations : A theoretical analysis and review of empirical research. *Psychological Bulletin*, 84, 888-918.
- Ajzen, I., & Fishbein, M. 1980 *Understanding attitudes and social behavior*. NJ : Prentice Hall.
- Fishbein, M., & Ajzen, I. 1975 *Belief, attitude, intention, and behavior : An introduction to theory and research*. Reading, MA : Addison-Wesley.
- 厚生省 1998 厚生白書（平成10年版）
少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」
を持てる社会をー ぎょうせい

（本学助教授函館校）